上毛新聞
（第3種郵便物認可）
2000年（平成12年）1月17日（月曜日）

互いに協力し登頂を果たして、喜びを分かち合う参加者

共生目指して
台湾・玉山登山行

▷中

ご来光直前に全員登頂

成長

谷側の斜面は、見渡すかぎりのはげ山。日本の画社が伐採した残骸だ。植林の形跡は見当たらない。

朝沢、内田、高木の知的障害を持つ若者三人は、自ら進んで二日分の水と食料の大部分を背負ってくれた。玉山には全行程のどこにも飲み水はない。登山道は基本的には緩い傾斜であるものの、彼らの荷物は相当な重さになっているはずだ。

道中、高山植物が目に付く。「玉山南竹」という植物は、学名をユシャン・ニイタカアメンシスという。

お目当ての高山植物撮影のために、重い写真機材を背負った加藤さんのサポート役を、知的障害を持ち、小中学生時代人前で話せなかった高木君が務める。山道に花を探し、加藤さんに大声で教える姿が印象的だった。

待望山荘には予定通り、約七時間で到着。標高三四〇〇㍍とはいえ、高い松の木や低木などが、文字通りうっそうと茂っていた。

登山二日目、早朝二時半出発。しばらく行くと、道は急峻な岩場にかかる。鎖場が出てくるが、これは林さんが日本の八ヶ岳を登ったときに習熟し、台湾山岳協会が作ったものだ。ヨーロッパアルプスの最高峰、モンブラン（四八〇七㍍）登山の経験もある若い朝沢君は、他の若者二人を先導した。彼は台湾登山参加のために、持病のパニック症を一カ月間我慢していた。

一気に標高三五百㍍を登り、ご来光直前に全員登頂を果たした。元気な富沢さんと須江さんが、玉山北峰を目指して急斜面を転げ下りていく。冬には数十㍍の積雪を見ることもあるという山頂。気温は摂氏三度。風もなく快適そのものだった。

（金谷通）